

への対応等の機能をもちます。私は、現在、Operations Plan の係留系、漂流ブイの部分を担当しています。また、集中観測時には現地本部で、船舶、係留系、漂流ブイからの海洋データを収集するとともに、各プラットフォームにそれらのデータを提供するという仕事をする予定です。

TCIPO のおかれている UCAR や NCAR からは、高層気象観測点や航空機関係で、多くの職員が COARE に参加します。8月17日には、安全、健康、保険に関する説明会がひらかれ、ソロモン諸島に派遣される職員、学生には各種予防接種がおこなわれた。旅行者にとって

は、南海の楽園でも、長期の観測にたずさわる COARE 関係者にとっては、楽園からはほど遠い生活となることが実感されたにちがいません。

〔編集委員会より：この文章は、本欄の執筆者、黒田芳史氏が、海洋科学技術センターの広報誌「なつしま」に書いたものを元に加筆・修正したものです。また、同氏は TCIPO の活動のより実務的な側面に触れた文章「TCIPO からの通信」を、シリーズで、OASIS Newsletter (編集・発行事務局：花輪公雄氏・東北大学理学部地球物理学教室) に寄せています。〕



井上 治郎編著

『極地気象のはなし』

技報堂出版、1992年5月25日発行
173ページ、1545円

極地というところは、文字通り人跡未踏の地でありながら、地球の気象にとってたいへん重要な地域であることは論をまたないでしょう。本書は、その極地における気象現象についていろいろな話題を、それぞれ各分野の専門家が執筆し1冊の本にまとめたものです。本書が扱う地域は、北極や南極だけにとどまらず、ヒマラヤや南米のパタゴニア、はたまた灼熱の砂漠地帯にまでわたっています。書かれている内容の例を上げれば、最近特に話題になっている南極上空のオゾンホール、南極大陸のカタバ、風、氷河の変動のしくみ、砂漠からの水蒸気の蒸発などです。しかし、このような一見関連の無いような

気象現象を、異なった筆者が次々と記述しているにしては全体に良くまとまっており、読んでいて違和感なく一気に読み上げることができました。各著者だけでなく、本書を計画した故井上治郎氏の気象現象全体に対する造詣の深さにあらためて敬服させられる一冊です。

本書は一般の読者を対象にしているだけに、図や写真が効果的に使われ、複雑な気象現象を説明するには文章もたいへんわかりやすくなっています。したがって、極地気象には門外漢である私のような人間でも、今極地気象でどのようなことが話題になっており、その現象が極地だけにとどまらず、地球規模の気象にとってどのような問題をはらんでいるのかをよく理解することができました。極地気象に関して、単語は知っているがその内容は良くわからないといった方には、まさに最適な入門書といったところででしょう。

(気象庁数値予報課 野村 厚)